

2024年4月5日

遙かな光景……1950年代の大井第一小学校

1957年(S32)卒 梅組 安田 央

★ はじめに(大井第一小学校転入前のこと)

1952年(S27)3月、わが家は小田原市御幸ヶ浜の疎開先から母の実家跡の現住地大井6丁目(旧大井鹿島町)に転居し、翌4月、私は大井第一小学校の2年に転入したが、その前に、私の控えめな性格を形作った事柄や1950年代の地方の小学校の状況について触れさせていただこう。

1944年3月、予定日より3週間早く西大井4丁目(旧出石町)の産院で誕生した私は母の実家が強制疎開の憂き目に遭ったことから小田原市に移り、元小田原本陣の家で7年過ごした。しかし、5、6歳の時は、母が当時国民病と言われた肺結核に罹病して三鷹の病院に入院、父は東京で仕事と両親とも不在。また、2歳下の弟も小児結核で近くの病院に入院しており、独り置去りの私は女中さん(現:家政婦)に面倒を見てもらいながら幼稚園に通った。早生まれで身体が小さく、小児結核前期症状の肺門リンパ腺炎に感染していた私は小学校入学が1年遅れ、1951年(S26)によりやく箱根町強羅の函南白百合女学園付属小学校に入学した。セーラー服を着て自宅前から市電で小田原駅に行き、さらに箱根登山鉄道の通学専用電車で約1時間、女子中高生に交じって強羅に向かう。小学校は女子児童が1学年7、8名、男子児童は3名だが3年間しか在籍できない。教室は畳敷きの和室で、机は座式の長机。和服姿の中年女性教師が一人で全学年を教える寺子屋式の学校だった。それでも週1回の朝礼は、教会の鐘の音が鳴り響き、山羊の鳴き声も聞こえる中、箱根連山を背景にしてマスールやマメールが高台に立ち並ぶ。その光景は、まるで映画「サウンド・オブ・ミュージック」のように美しかった。なお、学園の敷地の中に小学校と並んで孤児院があり、戦災孤児が数多くいた。現れない家族を求めるかのように見つめる彼らの切ない眼差しは、未だに忘れられない。

前書きが長くなったが、いよいよ本題に移らせてさせていただこう。ただし、ほぼ70年前の回顧だけに記憶は定かではなく、当時の大井第一小学校のあり様を的確に伝えられるか、まったく自信がない。文中、記憶違いや誤記等も散見されるだろうが、後日、正していただければありがたい。なお、文責は全て私に帰するものである。

★ 大井第一小学校を取り巻く当時の街並み

大井第一小学校は、我家の隣にあった高橋さんの家の角を左折してなだらかな坂を約100m上がれば南門に辿り着く。

かつて大井第一小学校の近くには、様々な店や施設があった。正門の向かい側は、交差点から鹿島神社方向に向かって「文具」・「外科医院」・「不動産」・「果物」・「パン」・「教会」・「歯科医院」・「鮮魚」・「青果」・「材木」等の商いが並び、大井町駅方向の向い側には「酒」・「時計」・「表具」・「写真館」・「和菓子」・「中華料理」・「電気器具」、手前側は「駄菓子」・「理髪」・「銀行」・「そば」・「ガス器具」・「文房具」・「洋服仕立」・「肉」・「布団」・「薬剤」等の店が軒を連ねる。交差点から西の滝王子に向かっては、左側に「花」・「大井警察署」・「剣道道場」・「新聞販売」・「ガラス」・「時計」・「炭、氷」、右側は「寿司」・「自転車」・「鰻」・「公衆浴場」・「外科医院」・「葬儀社」・「薬局」等々。反対の東方向は、校舎の向かいに「産科医院」と少し下ったところに「パン工場」があった。

これらの数を数えるだけでも大井第一小学校を取り巻いていた街がどの位活気づいていたかわかることだろう。なお、この頃のバスの停留所の名は、江戸幕府代官所の触書を掲げる場所を指す「札場」(呼称:ふだば)だった。維新後80年以上を経ているにもかかわらず、私の時まで江戸時代が続いていて何かおかしさを覚える。

★ 当時の校舎と校庭は…

1952年(S27)4月、私は大井第一小学校の2年雪組に転入した。担任は音楽も教える松崎滯子先生。同じ学年は松・竹・梅・月・雪の5クラスですべて定員50名。教室では二人用の机に男女の児童が仲良く座って授業を受ける。エアコンがない時代なので、暑い夏は天井で回る扇風機の風で涼み、寒い冬は部屋隅にある石炭ストーブで暖をとる。

校舎は木造平屋建て。私の時は、児童数が増えて教室不足になったため、1、2年生の授業が週ごとに午前と午後が変わる2部授業制だった。

校舎の配置は今とほぼ同じだったが一部違い、南門を入るとすぐ右に太平洋戦争前に造られたプールがあった。しかし、長年放置されていたため水草がはびこり、ボウフラが湧く澱んだ水で実に汚らしい。在学中は一切利用できなかった。

朝礼や運動会を行なう校庭は土のグラウンド。出入り口の正門と南門は鍵がかけら

れていないので、誰でも自由に校庭へ入れた(夜間は宿直の先生が校内を適宜巡回)。

西側校舎の前には今も残る藤棚があり、北側校舎の前に柏の木、校庭の東正面に大きなヒマラヤ杉が聳え立ち、豊かに葉を茂らせていた。そのころは高い建物がなかったため、ヒマラヤ杉の下からは鮫洲の先の東京湾が見渡せ、行き交う船や帆掛け舟、そして遥か先にお台場の樹木等も望見できた。時にはこのヒマラヤ杉の下で授業が行われることもあった。校庭の上空には近くの光福寺あたりから来る鳶が円を描いて飛び交い、校舎の軒下に燕の巣もあった。この他、春先にはオタマジャクシから孵ったカエルが飛び跳ね、秋口にはトンボが飛び交って鉄棒に止まる。時には校門からヘビが入る等、校内は生き物の楽園でもあった。

さらに、学内では小動物が飼育されていて、児童は北側校舎前の校庭に立ち並びウサギ、ニワトリ、亀等の小屋に入って世話をする。同期生:山田勝弘君や望月静子さんによれば、その中に本通りの鳥屋さんから贈られたリルという名の猿もいたが、リルをからかった片又昇君が噛まれて数針縫う怪我をしたそうだ。なお、私の記憶では、プールの先の南東側に豚小屋もあって小使いさん(現:用務主事)と一部の男子児童が世話をしていた光景が思い浮かぶが、定かではない。

当時、全校朝礼は校庭で行なわれ、その終わりには、松崎先生が弾くオルガンに合わせて音楽教師の佐治恒夫先生が指揮をする校歌を斉唱したものだ。

2年生の時はこうした情景だったが、翌年から普通授業になり、給食も始まる。

やがて1、2年後に戦前のプールが取り壊されて理科室が建ち、くすんだ色の平屋校舎も明るい黄土色の2階建校舎になった。続いて正門の内側に朝礼も行う講堂兼体育館が新築され、ほぼ今の形に近いレイアウトに変わった。

(注 1.)給食で人気があったメニューは揚げパン、鯨の串カツ、カレーやクリームのシチュー類。

最も不人気だったのは脱脂粉乳で作られたミルク。コッペパンは、北側校舎の向かいにある「大井製パン」(同期生:望月静子さんの実家が経営)から運び込まれていた。私は何でも食べたが、食感と匂いが嫌いな肝油の粒だけは何時も主菜と一緒に飲み込んでいた。

★ さまざまな児童

私が在学していた当時、小中学校は入学区域が定められていたが、大井第一小学校は評判が高かったため、区域外の伊藤町や原町、浜川町あるいは元芝町、立会町等から通う児童がかなりいた。そうした生徒は全体の3割近くいたのではないかと推測される。

しかも児童の親は、「すし屋」、「そば屋」、「時計屋」、「和菓子屋」、「酒屋」、「とび・大工・植木職」、「医者」、「警官」等と千差万別。中には我家のように父親が無職の児童も

いて、校内には実にさまざまな気風が流れていた。また、親が中国や台湾、あるいは朝鮮から来た児童は、自ら家のいわれを話して互いの家を行き来し、生徒同士の絆を深めていた。振り返れば、職の貴賤や身の出自を何ら問うことなく大らかに過ごせる、多様で平和な校風だった。

世間はまだ自動化されない手作業中心の社会だったので、小学生といえども貴重な戦力として家業や家事を手伝い、その合間に遊ぶのが普通だった。だから教室の掃除は少しも苦にならない。皆、楽しそうに雑巾がけや窓ガラス拭きに取り組み、母親然とふるまう女子の指図に素直に従っていた。

それから大井第一小学校の児童が被る今の帽子が定められたのは、私が在学していた1955年あたりだったのではないだろうか。あの頃の学生や児童の帽子と言えばほとんど学生帽。その風潮の中、英語名:クルー・ハット、和名:メトロ・ハットと呼ばれる帽子を大井第一小学校が採用したのは、実に斬新で世を先駆けていた。明治生まれながらリベラルな私の父親は帽子をすっかり気に入ったが、当の私は、何か形が女々しく見えて恥ずかしく、通学や学校行事以外、ほとんど被らなかった。

★ 昼休みは…

昼休みになると、低学年の男子は「めんこ」、「ベーゴマ」、「ビー玉」、「凧揚げ」等で、女子は「おはじき」、「手まりつき」、「花いちもんめ」、「ゴム跳び」等で遊び、皆揃うと「鬼ごっこ」や「缶蹴り」をした。

(注 2.) テレビが行き渡っていなかったこの時代、低学年の子供たちを夢中させたのは紙芝居だ。週1回、我家の隣の光福寺の参道に紙芝居屋が来ると、子どもたち12、3人が群がり、買った駄菓子を口にくわえつつ、目を輝かせながら「月光仮面」や「鞍馬天狗」の始まりを待つ。一方、紙芝居屋は、駄菓子を買わない子どもが近寄らないよう地面に立入禁止の線を引いてから紙芝居を始める。かくして、親から駄菓子を買ってはいけないと言われる子どもは、立入禁止線の外からおじさんのセリフを途切れ途切りに聞くことになる。

やがて体力が整い始める4年生ぐらいになると、男子は「相撲」や「野球」に目を向け、女子は「馬跳び」、「大縄跳び」、「バレーボール」等で活発に動き回る。6年の時は、ほとんど毎日、男女一緒に校庭で「ドッジ・ボール」をして遊んだが、この年代では、概ね女子の方が男子よりも体力が勝っていて、軽量の私は女子から何度も弾き飛ばされたな。

余話：得点3点です試合終了

6年の時の野球は、他のクラスとの対抗戦を校庭で何回かやったが、梅組はいつも負けていたような気がする。面白かったのは、浜川から通っている瀬尾君が設定した地元浜川小学校児童との対抗戦だ。当時、浜川小学校は今の浜川公園に校舎があり、現在浜川小学校が建っている場所が浜川小学校の校庭だった。その場所で、東海道線を挟んで高台にある大井第一小学校と鮫洲の漁師町を中心にする浜川小学校の児童が対戦したわけだ。

双方、ジャンケンで攻守順と主審を決め、「回数は決めずに得点が3点になったら試合を終了する」という特別ルールで戦う。最初は楽しく始まるが、やがてどちらかが得点して2点目が入ると雰囲気は一変、険しい空気になる。そして遂に3点目が入った瞬間、負けた側の児童が勝った方の児童に飛び掛かり、あちらこちらで取っ組み合いの乱闘になる。しかし負け組が憂さを晴らす騒ぎは2分程度で収まり、双方、泥だらけになって帰路に向かう。

今振り返ると、不思議なことがいくつかある。試合は両校の児童だけで、教師や父兄、年長者等が試合に立ち会うことは全くなかった。どちらかのチームから主審1名を出す。だが、試合中、例え相手チームに属す主審であっても、その判定に不服を唱える者はいなかった。また、ゲームセット後の取っ組み合いでもバットや長い棒を振るう者は全くなく、全員素手で立ち向かった。どの児童もどこまでならば取っ組み合いとして許されるのか、分かっていたようだ。この「ワンパク戦争」もどきの対戦は、意外に面白かったせいか、2、3回やったような気がする。

★ 勉学について

ところで、1955年(S30)まで在職された葛生校長は全国小学校校長会の会長を務めており、大井第一小学校に赴任することが教師の憧れだったと聞く。それだけに、先生方は熱心に児童の進学や将来に役立つ授業を行なったようだ。その一方、さほど進学率が高くない時代だったので、義務教育が終わったら進学しないで家業を継ぐとか、就職して働くと考えている児童も多かった。教室には進路さまざまな児童が溢れていた時代だったが、その中で先生方はどの児童にも公平に接し、根気よく教えていたように思える。

私が在学中に知った先生は、武井春夫、原登志、村田チエ、高橋シズ、塩谷泰賢、石毛隆夫、奥富静子、中嶋吉郎、神崎三郎等の方々だが、担任は、2年が松崎澪子、3年が鈴木万造、4年は衛本海、5、6年は波木井昌嘉の先生方で、どなたも穏やかで優しい方々ばかり。教室で立たされることがあっても、顔や身体を叩かれるような体罰を受けた者は一人もいなかった。

だが、家庭内の体罰が今ほどとがめられなかった時代ただけに、中には体罰も辞さず独自の考えで授業を行った教師もいたようだ。仄聞だが、ある組の担任教師は中学受験に向けた独自の試験を重ね、成績優秀者を自分の私塾に招いて補習。

他の児童は進路や成績別に分けて指導し、体罰も下したそうだ。ほどなく彼は退職し、予備校教師に転じた。

(注 3.)当時、鈴木万造先生と松崎滯子先生のご自宅は大井4丁目(旧倉田町)にあり、松崎先生は後に東大井3丁目(旧元芝町)に転じた。また、武井先生は大井第一小学校の校内西端にあった建物に居住した後、やはり大井4丁目に居を構えた。他にも居るかも知れないが、小学校から5、600メートルの範囲に複数の先生方が住んでいたことは特筆される。

ところで、大井第一小学校のレベルは高いのかどうなのか、在学中、私はまったく気付かなかった。当時は、大学進学率は低かったものの、まだ大学の数と定員は少なく、合格がかなり難しかった時代だ。ところが、周りに東大や東工大あるいは医科大に通う年上の卒業生がかなりいたので、私たちは、これらの難関校が遥か懸け離れた大学とは思わなかった。実際、私の期でも男女4名が東大に進み、東工大や医科大等を含めれば1クラスあたり5、6名程度は難関校に入っているのではないだろうか。彼らは誰とでも親しくして互いに遊び合う普通の小学生であり、単に勉強漬けの者は殆どいなかったように思う。進学だけで学び舎の良し悪しを判断するのは適切ではないが、さまざまな児童の中から難関の進学を果たす者が多く生じた結果は、「大井第一は優秀校」との世評を裏付ける一端かもしれない。

なお、学習塾に通ったり、家庭教師に学ぶ者は数少なかった。塾は、有名中学受験のためでなければ、学校の授業に追いつけない子が補習を受けに行くところだと見る親が多かったし、私たちもそう思っていた。一方、そろばん塾や柔剣道道場に通う者とか、琴・三味線、ピアノ、舞踊等の習い事をしている仲間は結構多かったな。

★ 遠足はどこへ…

遠足は、1年生の時は世田谷の多摩川園、2年生では横浜市の大倉山公園。3年生の時は千葉市の稲毛海岸で潮干狩り、4年生では村山市の村山貯水池(現:多摩湖)と所沢市のユネスコ村。5年生の時は鎌倉市の鶴岡八幡宮や建長寺と大仏を、6年生の修学旅行は日光市の日光東照宮だった。私は転校生だったので2年生から参加したが、遠足は全て鉄道利用でバスは使っていない。

4年生頃までの遠足には母親がかなり同行していたが、5、6年生になると親の参加はほとんど無くなった。鎌倉行きは京浜東北線と横須賀線の乗換1回で済んだが、日光への遠足は、まだ都営地下鉄が通っていないため、京浜東北線の上野で営団地下鉄に乗り換えて、浅草で東武電車に乗り込まなければならない経路だった。

行動が活発になっている生徒を束ねて引率する先生方は相当苦労されたに違いない。

★ 運動会では…

毎年10月、校庭で紅白戦の運動会が行われた。転校時、私は既往症があって医師から運動を禁じられていたため、3年生になってから運動会に出た。だが、あの頃の10月の気温は今より低く、寒さに震えて寒冷アレルギー状態になったことを覚えている。

運動会の種目は、徒競走、玉入れ、パン喰い競争、綱引き、棒倒し、ピラミッド等で、児童による応援団はなかったと思う。

同級生に在学中の運動会は？と聞くと、誰もが6年生の時にプロレスラー遠藤幸吉さんと木村政彦さんの二人組と対戦した綱引きを思い出すに違いない。戦後わずか10年のあの頃、全国どこでも人々は力道山一門が繰り広げるプロレスに熱狂し、大井町でも駅前の阪急百貨店の脇にある街頭テレビの前はプロレスの試合を見る黒山の人だかりで溢れた。その力道山の長男が大井第一小学校に一時在学したため、その付き添いで小学生も知っている遠藤幸吉さんと木村政彦さんが運動会に現れたのである。二人は私たちに勝ちを譲り、にこやかに退出したのではなかったか…。

★ 夏休みには …

遠足や運動会の他、夏休みは千葉県内房の保田海岸や岩井海岸の宿に泊まる臨海学校と神奈川県箱根町の温泉旅館に宿泊する林間学校が設けられた。私は6年生の時に林間学校に参加した。行った先は、江戸時代から続く箱根町塔ノ沢の環翠楼。旅館名も伊藤博文公の手で命名された由緒ある温泉旅館だが、何もわからない私にとってはただ古めかしい木造の粗末な宿にしか見えなかった。日中は芦ノ湖・関所跡・大涌谷等を見学し、夜は参加児童による寸劇やキャンプファイヤーで楽しんだ。臨海学校の参加者も存分に泳ぎ、浜辺でスイカ割りや花火を楽しんだに違いない。

(注 4.)環翠楼では別館に宿泊したようだ。恐らく学校と宿で打ち合せ、滞在客に迷惑が及ばぬ別館貸し切りにしたのではないだろうか。なお、その後、別館は改修され、高級・高額な宿舎に生まれ変わった。高度成長の前の時代だったので老舗の温泉旅館を安く使えたのだろうが、今では到底考えられないことだ。

この他、夏休みは、ラジオ体操が行われる他、校庭で先生方の手により日本映画が上映され、父兄も一緒に楽しんだ。子ども心に覚えているのは、鞍馬天狗等の千

チャンバラものが多かったこと。4年生の時の大河内伝次郎主演「平手造酒 こけ猿の巻」の時は、松崎、木幡、鉾丸君たちとスクリーンの裏側に回り、スクリーンに写り込む殺陣に合わせたチャンバラ・ごっこをして楽しんだ。

(注 5.) 当時は、銀幕にヒーローが登場する場面になると、観客の子どもたちは拍手をしたものだ。この風習は日本だけかと思っていたが、後年見たイタリア映画「シネマ・パラダイス」にヒーロー登場でイタリアの子どもたちが拍手をする場面があった。テレビ普及前の時代、映画鑑賞で子どもたちが拍手するのは全世界共通だったようだ。

★ 課外授業は心ウキウキ…

私たちの課外授業は、音楽や映画の鑑賞が多かった。

初めて学外で音楽を鑑賞したのは、1954年、4年生の時だったように思う。ある日、日本交響楽団(現NHK交響楽団)が練習所としている星薬科大学(品川区荏原)の大講堂に行き、生れて初めてオーケストラの演奏を聴いた。覚えた曲はたった1曲。格好いいトランペット演奏で始まるスッペの「軽騎兵」序曲だ。この演奏会は品川区が日本交響楽団に区内小学生向けの音楽教室として依頼して開催したもので、他校の生徒たちも一緒に聴いていた。

(注 6.) 日本交響楽団は、1951年、日本放送協会(NHK)の支援を得てNHK交響楽団と改称したが、練習所が高輪に移転する1960年代まではNHKでの演奏を改称名称で行ない、NHK以外からの依頼演奏会は日本交響楽団の名称を用いていた。なお、私が初めて聴いた時のコンサートマスターは後に私が朝日ジュニアオーケストラで師事した日比野愛次さん。彼の前のコンサートマスターは、黒柳徹子さんの父親、黒柳守綱さん。

翌1955年は、アメリカから来日したシンフォニー・オブ・ザ・エア(NBC交響楽団)が日比谷公会堂で行なった舞台練習(ゲネプロ)を聴きに行った。曲目は全く記憶に無く、ただ外国人ばかりの楽団を見たという印象だけが心に残っている。

6年生の1956年には、日比谷公園の旧野外音楽堂(後に取り壊され、現在は噴水)で消防庁音楽隊の吹奏楽を鑑賞した。ここでも演奏曲はほとんど記憶に無いが、最後に「行進曲軍艦」が演奏されると、男子生徒が思わず口ずさんだのを思い出す。何せこの曲は、流行歌の「お富さん」とともにパチンコ店の拡声装置から大音量で街中に流れていたの誰しも聞き覚えている。一方、女子生徒はさほど喜ばない。男子よりも早熟な彼女たちは、当時流行り出したエルヴィス・プレスリーの「ハートブレイク・ホテル」や「ラブミー・テンダー」を聴きたかったのかもしれない。

(注 7.) この当時はテレビが高額のため家庭にさほど普及していなかったので、日頃の楽しみはラジオ放送の歌番組やドラマだった。児童の間では鉱石ラジオ作りが流行り、私もアンテ

ナを手に持ちながら街中を歩き回った。中には、英会話を学びつつ欧米の文化や音楽を知ろうと考え、駐留米軍のラジオ放送F E N(現A F N)にダイヤルを合わせる者もいた。

あの頃の最大の娯楽は映画を見に行くことだったが、大井第一小学校では映画を鑑賞する授業もあった。今は1館もないが、当時、大井町には映画館が7館あり、私たちは教師に引率されて三ツ又交差点の手前にあった大井映画劇場とか大井1丁目(旧権現町)の武蔵野館に行き、内外の映画を鑑賞した。記憶に残っている作品は「ピノキオ」、「白雪姫」、「ダンボ」といったディズニー・アニメや「小鹿物語」等の児童向け劇映画だが、高峰秀子主演の「二十四の瞳」では私も同級生も思わず涙を流した。心に残る作品が多かったキネマの時代だ。

この他、大井第一小学校では外部を招いた催しがあり、1年生の時は開局間もない日本放送が来校して中継し、5年生の時は文化放送の子どもクイズ番組の収録が行われた。さらに6年生の時は、東京都の指定による公開化学実験を講堂で行ない、秋には開校80周年の記念の航空写真を撮影するため、全校生徒が80の字を描くように校庭に並んで飛行機の到来を待ち続けた。いずれも懐かしい思い出だ。

★ 立入禁止の場所…

1950年代はまだ市街地の整備が行き届かず、大井町もいたるところに柵もない用水路が巡っていた。そこに持ち物を落としたり、時には低学年の児童がうっかり足を踏み外して水路に落ちて通行人に引き上げられたりした。

傍から見れば少し危ないところでも、上級生になってくると、やりたいことがあるれば危険を顧みることなくついつい足を向けてしまうものだ。

例えば、私が加わっていた6年梅組の野球チームは、狭い校庭でキャッチボールやバットを振り回すことは出来ないので、放課後にどこかの空き地で練習しなければならない。当初は狭い鹿島神社の境内で練習したが飽き足らず、やがて旧倉田町の踏切を渡った先にあるカネボウの廃工場跡(現:東京品川病院敷地)で練習するようになった。ただし、右中間に空襲で空いた大きな穴があるので、踏み外せば4、5m落ちて下の立会川に転げ落ちる物騒な場所だが、幸いなことに誰も落ちなかった。

身の回りにある危うさを思えば大井第一小学校はとても安全な場所だ。勉強や仲間付き合いが嫌だと少し思っても、何気なく毎日登校するのが当たり前。当時は、長い期間引きこもって登校しない児童なんて殆ど聞かなかったと思うがどうだろう。一旦校門の中に入れば安心感を覚えたのはどうしてなのか。実に不思議だ。

一方、殆どの児童は、親たちから決して入ってはいけない場所を伝えられていたことだろう。その場所とは、国鉄(現:JR)大井町駅西口の北側で、東急電鉄大井町駅との間にある大井1丁目(旧権現町)の一角ではないだろうか。

大井町駅西口から砂利道を挟んだ向かいには木造の怪しげな飲食店が立ち並び、世間の人々の立ち寄りを拒むような雰囲気漂っていた。何故立ち寄ってはいけないのか、その頃はよくわからなかったが、それでも何か禍々しく怖い場所に思えた。

一方、駅西口の南側は、旧カネボウの建物を改修して開店した阪急百貨店へ買物客がひっきりなしに入り、その先の三ツ又商店街も賑わっている。当時の大井町駅西口は駅の左右でえらく違っていたが、社会の縮図を一挙に見られる場所でもあった。こうした光景を目にしてこそ、知らず知らずのうちに学業では学べない予防意識を得たように思える。言い換えれば、安全な家庭と小学校から一歩外に出れば周りにはさまざまな禁足地があり、その傍らを注意しつつ歩んだ小学生時代だった。

(注 8.) 1950年代の国鉄大井町駅西口は面白い駅だった。建物は平屋で、改札口から入ると、一旦地下に降りてから階段を上がり、京浜東北線のホームに上がる(東口は南品川方面と国鉄大井工場の敷地に繋がる改札口)。

乗降客の顔触れは時間帯により毎日何回も変わる。朝は会社員と学生の通勤・通学、昼前から競馬場やオートレース場に行く風来坊と博打打、夕方は銀座・新橋のバーやキャバレーに出勤するホステスで脂粉の香りがホームに充満、午後6時過ぎからは会社員や学生が帰宅、午後10時以降は酔客と帰宅するホステスたちのアルコール臭が漂う。

また、駅の構内には、正月は門松、12月はクリスマスツリーが駅員の手で飾られ、7月はホームの両側に七夕飾りと短冊が、8月、9月は風鈴が吊られて爽やかな音色を響かせていた。こうした情緒ある風情は、最早見当たらない。